

講演会報告

オットハイน์・ラムシュテット教授講演会報告

大石紀一郎

2000年11月、ビーレフェルト大学社会学部のオットハイน์・ラムシュテット教授(Prof. Dr. Otthein Rammstedt)が来日し、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部で、日本ドイツ学会、東京大学教養学部ドイツ語部会および DESK (Deutschland-Europa-Studien in Komaba = ドイツ・ヨーロッパ研究室)プログラムの共催によるコロキウムと講演会が行われた。

ラムシュテット教授は 1938 年生まれ、フランクフルト大学とミュンスター大学で社会学、心理学、歴史学をアドルノとシェルスキーのもとで学び、1971 年にルーマンのもとで教授資格を取得して、1975 年以来ビーレフェルト大学社会学部の教授として教鞭をとっている。また現在刊行中のジンメル全集の編集を統括するとともにジンメル学会会長を務めている。教授の主要著作としては、Sekte und soziale Bewegung (1966), Soziale Bewegung (1978), Politische Psychologie (1981), (Hg.) Georg Simmel und die Moderne (1984, 1995), Deutsche Soziologie 1933-1945(1986), Konstitution der Soziologie (1987), Zur Ästhetik Simmels (1988), (Hg.) Simmel und die frühen Soziologen (1988), Programm und Voraussetzungen der "Soziologie" Simmels (1992), (Hg.) BRD ade! Vierzig Jahre in Rück-Ansichten von Sozial- und Kulturwissenschaftlern (1992)などがあり、さらに Georg Simmel-Gesamtausgabe in 24 Bänden (1989 ff.)および Simmel Studies (früher: Simmel Newsletter, 1991 ff.)の編集代表となっている。

11月14日のコロキウムで行われた発表 "Moral, Vernunft und Mord: Soziologische Überlegungen zum Kriminalroman im 'Geiste' des Kapitalismus" は、探偵小説を社会学的視点から読むという刺激的な試みであった。教授は、探偵小説が描く犯罪は近代における合理化の過程の産物であると同時にそれがもたらした問題を解釈するモデルであり、犯人の行動パターンには投資に対する利潤の極大化という資本主義の営利衝動がモデルとなっていると論じ、それに続いてこのテーゼについて熱心な討論が行われた。

"Sozialwissenschaft in und über Europa zum Ausklang des XX. Jahrhunderts" と題して行われた 11月17日の講演には多数の聴衆が来聴し、大石が日独同時通訳にあたった。以下に掲載するのは、そのときに行われた講演の原稿に教授がその後加筆されたものである。この講演は「ヨーロッパ」を考察する上で、われわれが従来ヨーロッパから受け入れてきた概念や研究のスタイルそのものを同時に根本から問い直さなければならないことを示唆する内容であり、講演に続いて、「ヨーロッパ」という「神話」についての理解や、集合的記憶と社会科学の課題との関係、オーストリア制裁以降の EU の行方など、教授が指摘したさまざまな問題について、参加者との間で活発で興味深い討論が交わされた。